

## 環境倫理の諸問題（1）

## Overview

- \* 環境問題の認識
- \* キリスト教と環境問題をめぐる歴史的背景
- \* 環境問題に対するキリスト教の応答
- \* 動物と人間の関係をめぐる倫理的課題
- \* まとめ——課題と展望

## 自然に触れる——私の体験から

- \* 虫取り（虫・魚・小動物の飼育）の経験
- \* 五感を使う。カイロスの気づき。ただ生きること。
- \* 生物多様性、システムとしての自然（無数の要素と全体の安定性）
- \* 壊すのは簡単。しかし、人間は細胞一つさえ作ることができない。
- \* 【参考】 養老孟司『いちばん大事なこと——養老教授の環境論』集英社、2003年（集英社新書）。小原克博「蟬時雨——「時」の変奏曲」（『京都新聞』「現代のことば」2006年8月30日）。☞ 小原克博 On-Line

## 環境問題の認識

## エコロジーとは

- \* もともとは生物とそれを取り巻く環境との関係を研究する生物学の一分野。生態学。
- \* ドイツの動物学者E・ヘッケルが1866年に著作の中で用いたのが最初。
- \* 自然保護運動の高まりと共に、今では生物学の領域を超えて、広く環境保護という意味でも用いられるようになる。

## エコロジーに関連する言葉・テーマ

- \* 語源はギリシア語の「オイコス」（家）
- \* エコノミーも同様。
- \* 環境問題と経済問題は表裏一体の関係にある。
- \* 「地球にやさしい」？
- \* 人間の倫理・食の倫理・動物の倫理の一体性

## 環境問題における先駆者（1）

\* レイチェル・カーソン（1907-1964）

\* 『沈黙の春』（1962年）

\* 「アルベルト・シュヴァイツァーに捧ぐ。シュヴァイツァーの言葉——未来を見る目を失い、現実<sup>まじ</sup>に先んずるすべを忘れた人間。そのゆきつく先は、自然の破壊だ」。



## 環境問題における先駆者（2）

\* アルベルト・シュバイツァー（1875-1965）

\* 生への畏敬の倫理：「私は、生きんとする生命にとりかこまれた生きんとする生命である」という事実（『文化と倫理』（著作集第七巻）311頁）

\* 「われわれが〔倫理的〕葛藤をいよいよ深く体験するならば、われわれは真理のなかにある。疚<sup>とが</sup>しくない良心などは、悪魔の発明である。」（同書、322頁）



\* 生命中心主義の先駆者的役割を果たす。

## 環境問題における先駆者（3）

\* 神の信託管理人思想

\* ウォルター・C・ラウダーミルク（1888～1974）：第十一戒「汝、聖なる大地を、忠実なる僕（steward）として神より相続し、世代を次いで、その資源と生み出す力とを守るべし」。

\* 生命中心主義：生命あるいは生態系が最優先される。人間の価値は相対化される。ディープ・エコロジー。

\* 動物権主義：「動物の解放」運動（ピーター・シンガーら）

## キリスト教と環境問題をめぐる 歴史的背景

## キリスト教と自然

\* 道徳的指標としての「自然」（→自然法、自然神学）

\* 野蛮としての「自然」

\* 「黒人のもとでの奴隷制度のありかたからみちびきだせる、わたしたちにとって興味のある唯一の教訓は、自然状態というもの<sup>まじ</sup>が絶対の徹底した不法の状態である、という理念の正しさです」（ヘーゲル『歴史哲学講義』）

\* 自然は人間によって支配されるべき対象（→啓蒙思想）。

## 原生自然に対する態度

\* キリスト教的伝統の中では、「原生自然」（wilderness）は、呪われた大地、楽園の対極と見なされた。

\* 「原生自然」やそこに生息する野生動物に対する適切なキリスト教的態度は「征服」「鎮圧」であった。

## キリスト教の生態学的責任

- \* リン・ホワイト論争：1967年、*Science* 誌に掲載された下記論文がきっかけ
- \* リン・ホワイト・ジュニア「今日の生態学的危機の歴史的源泉」（『機械と神——生態学的危機の歴史的根源』みすず書房、1999年、所収）
- \* 生態学的危機の原因は、キリスト教の人間観・世界観にあると指摘した。

## リン・ホワイトの主張

「物理的創造のうちのどの一項目をとっても、それは人間のために仕えるという以外の目的をもっていない。そして人間の身体は粘土から作られたけれども、人間は単なる自然の一部ではない。人間は**神の像**を象って作られているのである」。

→ 創世記 1:27-28

## 創世記 1:27-28

神は御自分にかたどって人を創造された。**神にかたどって**創造された。男と女に創造された。神は彼らを祝福して言われた。

「産めよ、増えよ、地に満ちて地を従わせよ。海の魚、空の鳥、地の上を這う生き物をすべて**支配せよ**。」

### 神の像 (Imago Dei) とは？

【参考】小原克博「『神の像』に関する一考察——フェミニズムとエコロジーへの応答」、『日本の神学』第37号、1998年、33-54頁。☞小原克博 On-Line

## リン・ホワイトの主張

- \* 「キリスト教の、とくにその西方的な形式は、世界がこれまで知っているなかでもっとも**人間中心**な宗教である。……キリスト教は古代の異教やアジアの宗教（おそらくゾロアスター教は別として）とまったく正反対に、**人と自然の二元論**をうちたてただけではなく、人が自分のために自然を搾取することが神の意志であると主張したのであった。」
- \* 「自然は、人間に仕える以外になんらの存在理由もないというキリスト教の公理が斥けられるまで、生態学上の危機はいっそう深められつづけるであろう。」

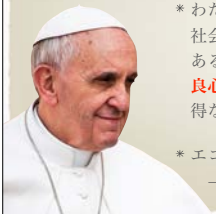
「西欧の歴史上の最大の精神革命、聖フランチェスコは、かれが自然および自然と人間との関係についてのもう一つ別のキリスト教的見解と考えたものを提案した。かれは人間が無際限に被造物を支配するという考えにかえて、人間をも含むすべての被造物の平等性という考えをおこすと試みた。（中略）初期フランシスコ会士の、自然のすべての部分の精神的自立性にたいする深く宗教的な、しかし異端的な感覚が、一つの方向を指しているかもしれない。わたくしはフランチェスコを**生態学者の聖者**においたい。」



「小鳥への説教」  
(ジョット、1305年頃)

## 回勅『ラウダート・シ』 (Laudato Si')

\* 教皇フランシスコは2015年6月18日、「エコロジカルな回心」(ecological conversion)を呼びかける回勅『ラウダート・シ』を発表した。



\* わたしたちに何ができるか、何をすべきかとの問いに対し、社会・経済・政治のあらゆるレベルにおける誠実で透明性のある対話を提案。いかなるプロジェクトも、それが責任ある良心によって生かされていないならば、決して効果的ではあり得ないと指摘する。(5章)

\* エコロジカルな回心

→ **エコロジカルな良心** (ecological conscience)

小原 克博



思つ。

「時は満ち、神の国は近づいた」。

これはイエスによる宣教の最初の言葉であるとされている。イエスは蟬時雨を経験することはなかっただろう。しかし、イエスの言葉の中には植物の生長や自然の機微に触れたものがきわめて多く、「時が満ちる」という原風景がイエスの経験の中に

日本には三十種類ものセミがいるが、その鳴き声と名前を一致させることのできるセミはどのくらいいるだろうか。アブラゼミ、ミンミンゼミ、ヒグラシなどはわかりやすいかもしれない。しかし、どのようなセミであれ、その生態に触れることは都会の生活の中では難しくなりつつある。

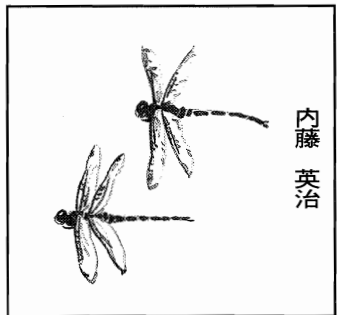
私は少年時代、典型的な虫取り少年であった。夏休みになると、早朝、昼間、夜と時間を問わず、山の中を歩き回ったものだ。主な目的は、クワガタやカブトムシ獲りであったが、その最中、何度となく、セミの脱皮に立ち会うことがあつた。

## 蟬時雨「時」の変奏曲

地中から這い出てきた幼虫は一時間近くかけて脱皮する。そして羽が乾き、体色が黒くなるまで、さらに一時間近くかかる。この時間のかかるプロセスに、なぜか私の目は釘付けになり、セミと同じように木にへばりついて、脱皮の様子を見守った。長い地中生活を経て、みしみしと言わんばかりに自らの殻を破って姿を変える変態プロセスは、好奇心をかき立てただけではない。その経験は、じつくりと待ち、時が満ちることを味わう原体験を与えてくれたように

多彩に刻まれていたことを感じさせられる。その満ちゆく「時」の感覚を新約聖書は「カイロス」と呼び、時計やカレンダーによって管理される「クロノス」と区別をしている。現代社会は圧倒的にクロノスが支配的であると言えるだろう。時間管理は人生成功のための処方箋とされる。予定表をくまなく埋めることが

できなければ不安を覚える若者が多いとも聞く。大量の情報をいかに効率よく処理できるか、その速度によって人の価値が計られる。勉強してよい学校に入れ、と子どもをせっせついている大人を見ると、脱皮の時(カイロス)を待ちかまえている幼虫の背中を無理やりこじ開けようとしているかのようには見え思ふことがあ



内藤 英治

ることが、かくも難しい時代において、自然界の小さな息づかいを感じ取ったり、自らの身体の内宿る固有の生命のリズムを慈しむことは簡単ではない。カイロスの経験は、クロノスによって著しく侵食されている。脱皮したセミは、たかだか一週間程度しか生きることができない。また同様に、クロノスは刻々と私たちの寿命を削り取っていく。しかし無慈悲とも言える生の現実の中で、カイロスの経験は生命が変化し、成熟することを教えてくれる。カイロスの原体験を持つことによつて、人は何度でも新しい生への「脱皮」の希望を持つことができるのではない。蟬時雨に耳を傾けながら、ふとそのような夢が、少年時代の思い出とともに頭をよぎつた。

(同志社大教授・キリスト教思想)